ウルグアイ雑感（6・11・19）

田中　寛康（昭25・理）

はじめに

25年理科を卒業しました田中と申します。昭和25年と言いますと、三高の一番最後の卒業生になる訳ですが、私の様な若輩が何故こんな話をする事になったかを一寸申し上げたいと思います。九月の十日に23・24・25年の卒業生のクラス会があったのですが、私、それに出ようと思っていたのです。出ればクラスメートや三高の自由寮の時の仲間に会えると思っていたのですが、急拠国際協力事業団（ＪＩＣＡ）の方からウルグアイの出張を命ぜられまして、八月の末から九月の中頃まで出かけておりました。そういう事もありまして、私のクラスメートや三谷先生と久しぶりにウルグアイの話をしようとここ（三高会館）にやって来ましたら、井垣さんにとっつかまりまして、十一月があいているから君是非やってくれと。一応お断り申し上げたのですが三谷先生からのお勧めもありこういう事になってしまった訳です。

お引き受けした一ツの理由としては、この中には南米をご存知の方も沢山おられると思うんですけど、一般的に日本人は南米はあまりご存知じゃないのではないかと思います。私自身も勤めている現役の間は東南アジアとかヨーロッパとか北アメリカ、アフリカは何回も出張していたのですが、南米は全然行った事がなかったのです。南米といえばアマゾンの森林とか、イグアスの滝とか、或は、私は神戸出身なんですが、神戸の港から戦前大阪商船のアルゼンチナ丸とかブラジル丸が移民船として行っていたのです。そのぐらいしか知らなかったので、それではという事で私も機会をつかまえて出かける事にしたのです。そういう事で少しでも多くの方に南米を知って頂けたらと思って今日こういうところでお話しする次第ですが、始めに私自身まったく無名ですので簡単に自己紹介をさせて頂きます。

私、三高を出てから遺伝学の勉強をしようと思いまして、その当時世界的にも有名だった木原均先生が京都大学の農学部におられましたのでそこへ入学しました。入って色々見ていたら何となく違和感を感じまして、商売がえをしまして、植物病理学といって、植物のお医者さん、そういう事を始めまして、其の後四十数年間いまだに続けてやっています。京大農学部を卒業しましてラッキーなことだったのですが、助手の席があきましてすぐにその研究室で助手に採用してもらいました。以後研究と大学院と学部の学生の指導をしながら九年間京都大学農学部で仕事させてもらいました。其の頃は昭和三十年代で米の増産が非常に叫ばれていた時代で、私自身も稲の

病気の研究で米の増産に一役買ったつもりでございます。けれども、そうこうしている内に米がオーバープロダクションになりまして米の研究はもうやめようと。農林省はしょっちゅう方針が変りますけれども。米やめろという様な事になりまして、三十年代後半からあっちこっちの県で水田を転換致しましてみかんを作る様になりました。これは食生活を豊にするということで果物の増産をしようと言うことだったと思います。そうしている内に農林省の方からお前農林省へこいと言われまして、昭和三十八年だったと思いますが農林省の果樹試験場へ行きまして、今度はみかんの研究、特にみかんのヴィールス病の研究を始めました。丁度日本ではみかんのヴィールス病研究が始まったばっかりでしたので、国際柑橘ヴィールス学会に入ったりして、外国の方ともコンタクトをとりながら色々な仕事をして来たのです。国の研究機関で一番悪い所を申しますと、すぐ年に応じてお前あっちへ転勤しろ、こっちへ転勤しろと言うことで仕事を変えさせられるという事です。大学から農林省へ移ったのは仕方がないのですが、農林省の中で、始め静岡県の支場にいましてみかんをやっていた。そしたら今度は広島県の支場へ行けと。そこはぶどうと柿を担当していたのでぶどうの研究を始めました。それからまたいま筑波にありますが、本場へ戻って来まして、今度はぶどう以外に梨や桃もやれと。こういうことでなかなか一貫して一つの研究が出来にくいという体質がございます。ぶどうのヴィールス病の研究を広島で始めたのですが、その時には日本でその分野の研究をやっている人がほとんどいませんでしたので、まあこれ

を少しやれば私はすぐ日本一になれるとまあそう思って始めました。色々の外国の学者ともコンタクトを取りました。そのうちに科学技術庁からお金をもらって、ヨーロッパ、アメリカと北半球をぐるっと一周して、研究所や大学のぶどうのヴィールス病研究の最先端の所を見せてもらったとまあそういうこともございました。そういうわけで、皆さんワインお好きかお好きでないかどうか分かりませんけれど、私はワインが一番好きになってしまったのです。後で時間があればワインのお話もしたいと思います。と、いうのは南米のウルグアイ、アルゼンチン、チリーはまったくワインの国でございます。

そうこうしている内にいい加減の年になってきますと、お前はもう研究をやめろといやおうなしに管理職にさせられてしまいました。丁度その頃に国際協力事業団（ＪＩＣＡ）の方で果樹についても海外技術協力が始まっていたのです。はじめは何と言っても東南アジアをはじめ低開発国の食糧増産ということで、米、小麦、豆、野菜とそういうところに技術協力がはじまっていたのですが、だんだん年がたってきますとタイの様に今年は完全に米がオーバプロダクションになって、ご存知のように日本にも沢山やって来るようになったのです。その頃、外国でも果樹の方に目を向けだしまして、昭和61年からＪＩＣＡのプロジェクトで果樹の技術協力を始めました。その時に外国でこういう技術協力をやるに当っては、やはり国内で色々な場面から支援しなくってはならないと。これはすぐおわかりの事だと思いますが、現在では農業関係のプロジェクトに

関しては、農水省の研究機関が全面的にバックアップするという体制を取っております。私自身否応無しに管理職にならされましてケニヤの園芸開発計画というプロジェクトを担当させられました。お陰様でケニヤへ調査団で行きまして、ケニヤの国立公園でライオンを目の前で見たり、キリンが走っているのを見たりとそういう機会に恵まれた訳でございます。

そうこうしている内に定年の一年位前にＪＩＣＡの方から、田中さん今度はあんた自身がウルグアイに行ってくれませんかという話がありました。ウルグアイの「果樹研究プロジェクト」は一九八六年から始まったのですが、まあ大体真中で選手交代というのが普通のパターンなのですから丁度交代期ですからあんた是非行ってくれという話でございました。私自身定年になったからといって遊んでいる訳にもいかないので、人と車の多い日本の中でごちゃごちゃしている所で勤めるよりも、ポッと外国へ行って異文化に接して新しいことを見た方が面白いのじゃないかと思いまして、しかもウルグアイは、南米で全然知らない国ということで、それじゃそこへ行って元気な間ひと頑張りしてみようかという事で決めました。そこで仕方なしに六十歳に近くなってからＮＨＫのテレビでスペイン語を勉強したりして時間を過して、一九九〇年の五月にウルグアイの方へまいりました。定年で辞めて二か月位色々な準備をして、単身でぱっと地球の裏まで飛び出したという事です。これが私がウルグアイに行く様になった経緯でございます。

国際協力事業団の技術援助

次に私が仕事していました国際協力事業団（ＪＩＣＡ）、これに関しまして、詳しくご存知の方もおられると思いますので、ごく簡単に申し上げますと、昭和三十七年の六月に海外技術協力事業団が設立されました。それまでＮＧＯ（非政府機関）その他色々な技術協力があったと思うのですが、政府レベルではこの年に始まりました。それから一方海外移住に関しても色々なレベルであったのですけれども、昭和三十八年の七月に海外移住事業団が設立されました。約十年間別個に活動していたのですけれども、どうも両者の間に密接な関係があると言いますのは、技術協力の方も初めは日本人の移住者、これはほとんど農業をやっている訳ですが、彼らが農業に従事して開拓し始めるのに色々な技術的な問題がある。それを何とか指導していくという事で、初めそういう方向への技術協力が始まった訳です。それで例えば南米の場合で申しますと、アルゼンチン、パラグアイ、ボリビアにＪＩＣＡ自身が農業試験場を作りまして、それで専門官を派遣しました。場所は日本の移住地の真中で、周りの移住者に色々な事で技術援助をするという事でスタートした訳です。それが次第に効果が上ってきますと、その周辺の現地の人達がそこの試験場に来るようになりまして、結局技術援助が移住者だけでなく、現地の人達にも及ぶ様になってきたのです。そういう様な事から、結局海外技術協力事業団と、海外移住事業団が一緒になりま

して、昭和四九年の八月一日に合併しまして、国際協力事業団、ＪＩＣＡ、ＪＩＣＡと言っておりますけど、それが設立されました。今年は丁度二十周年という事になります。

ＪＩＣＡの事業のことを一寸簡単に申し上げます。ＪＩＣＡがどんな事業をやっているかと言いますと、これは全部ＯＤＡの予算を使ってやっております。すなわち、全部政府レベルでやっています。現在ＮＧＯが色々な段階での技術協力、其の他やっておりますけれども、あくまでこれは政府レベルという事でございます。事業の内容は六つ七つあるようですが、主なものを挙げますと、技術協力が一つあります。技術協力は専門家を派遣する、或は相手国の技術者を日本に呼んで、より設備の整った日本で研修する、それから色々な事に必要な施設とか機材を供与する、そういう様な事が大きな柱になっておりまして、この三つを全部ミックスしたものが、プロジェクト方式技術協力とＪＩＣＡの方では言っております。この他に専門家が一人で出かけて、相手国に色々な技術支援をするという個別派遣という制度もございます。これらに参加する人は日本で技術的な経験の豊富な人でかなり年配の人、まあ五十歳以上、現在はＯＢが多いのですが、何故ＯＢが多いかというと一つ理由がございます。もし、例えば農水省の研究機関から現役の人がそういう所へ派遣されて二年位行ってしまいますと、いま大蔵省の方からそういう人を派遣するならそのポジションはいらないのだろうとすぐ定員カットになってくるのです。私達の研究機関でも否応無しに研究職に対する定員カットが毎年ございますが、その時一番安易なのはあいてい

る所をつぶすという事です。そういう様な事から現職の人は出したくない。或は本人も行きたくない。行ったら帰ってきても戻る場所がないという事で、私達の様な定年退職のOBという事になってしまうのです。それに対しまして、二番目の事業の内容として、青年海外協力隊というのがございます。これは大学を出た若い人達が若さに物を言わして、現地の奥深い所へ入り込んで現地の人達と一緒に生活をしながら色々な事を支援すると、そういう事です。それから、それとは無関係に人材を派遣するとか、或は無償で施設を供与するとか、色々やっております。

まあ沢山ありますが私の関係したのは、一番目の技術協力の方ですので話をそちらの方に持って行きます。まあ今の技術協力のごくアウトラインを申し上げますと、一番の問題は人材派遣ということでございます。人材派遣の場合に専門家の派遣は長期と短期がありまして、一年以上を長期、一年未満を短期、短期の場合は普通大体二、三ヶ月でございます。長期の方は大体二年単位で、その後は延長して行くというやり方でやっております。それでどれ位の人数を派遣しているかという事ですが、海外技術協力事業団が創立した、一九六二年は一二九人派遣されていました。十年後の七二年には四七八人で三・九倍、八二年二五二〇人でつぎの十年で五・三倍になった。それから九二年の場合には四一八六人、これは前の十年の一・七倍であったという事で増加率は現在下火になりまして、ほとんどコンスタントになりました。これはどういう事かと言いますと、外国からの援助要請はいっぱいくるのですが、結局人のリクルートの問題で、派遣する

適当な人がいないという事と思われます。日本の経済援助は色々な面で、金は出すけれども人は出さないと言われているのですけど、これははっきり申し上げまして、私達の経験から言って語学の問題が大きいのじゃないかと思います。アメリカの人は自分の国語の英語でみんなことを済ましますし、ヨーロッパから来る場合でも南米に来たらスペイン語圏ですから、スペイン、イタリヤ、フランスの人はまあ大体そういう言葉はみなしゃべりますから何の不自由もない。ところが日本人がああいう所に行けば英語でも出来ればまだしもなのですが、私らの年配の人は英語が出来ない人が多いのです。とくに私達の農業技術関係の場合、私も含めて言葉の下手な人が多いので、人探しの場合、言葉の問題がすぐに出てきます。そして下手したら、悪く言えば相手から馬鹿にされるという場面を私も目の前で見て来た経験がございます。現在国内にいる農業技術関係者でスペイン語のしゃべれる人はまずいないと思います。せめて英語でもしゃべれたらと思うのですけども、その辺が今後大きな課題だと思います。

今年の六月現在長期の専門家は一五八〇人海外に行っておりますけれども、その内プロジェクト関係が52%、個別関係が48%です。どこの国へ行っているかと言いますと、アジアが一番多く、なかでもタイ、インドネシヤ、マレーシヤ、フイリッピンが圧倒的に多く、これで大体全体の53%位です。中南米が¼の25%、中近東・アフリカが残りの20%余りとなっております。それで南米の場合をみますとパラグアイが一番多く、次にチリ、ボリビア、ブラジルです。

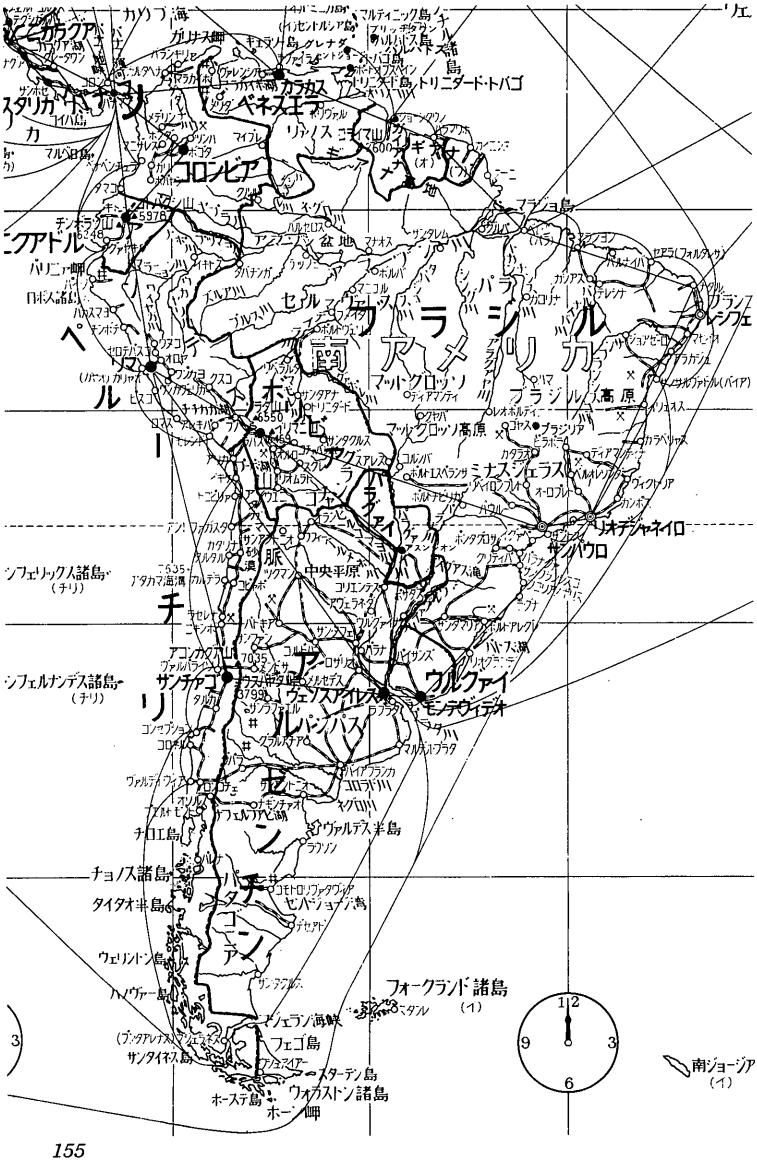
南米12ヵ国の人口，ＧＮＰ及び人種構成

国　名	独立	人口＊（万人）	ＧＮＰ＊	人種構成（％）＊＊					日本人移民
				白　人	メスティーソ	インディオ	黒人	東洋系	
I　アルゼンチン	1816	3,310	6,050	99 ス・イ系	1				2.1万
チリ	1818	1,360	2,730	>90 ス・ド系		<1			1,000
ウルグアイ	1825	313	3,340	90 ス・ド系	8		2		300
II　パラグアイ	1811	452	1,340	少々	大部分	<1			7,700
ボリヴィア	1825	783	680	13	32	55			7,700
ペルー	1821	2,245	950	11	43	46			5.5万
III　ブラジル	1822	15,628	2,770	54	34		10	2	631万
エクアドル	1819	1,074	1,070	10	41	39	10		20
コロンビア	1819	3,342	1,290	20 ス系	68	7	5		820
ベネズエラ	1819	2,025	2,900	22	66	2	10		450
IV　ガイアナ		81	330			5	44	48イパ	
スリナム		44	3,700	1		3	44	51イパ	

＊1992，＊＊1970年代，ス：スペイン，イ：イタリア，ド：ドイツ，イパ：インド・パキスタン（仏領ギアナ）

表の一番端の日本人移民、この数字はごく大雑把と考えていただきたいと思いますが、ブラジルが六三〇万人で圧倒的に多く、他の所はずっと少なくなります。ところがブラジルの場合にはブラジルの国内の農業関係の研究所はかなり進んでおります。研究所の研究員はみなドクターを持っていて、かなり進んでいるのであえて日本が応援をしなくてもいい。それに比べまして、パラグアイ・ボリビヤ・ペルーになりますと、向うの研究機関自身がレベルがまだ低いので日本からの援助が非常に期待されているという様な事で人材派遣はそういう所がむしろ多くなっております。

プロジェクト方式の技術協力ですけれど、どういう分野が多いかと言いますと、農林、社会、医療、鉱工業と分けて、農林関係が一番多くて大体42％位、全体の半分とはいいませんが、その位が農業関係、これは低開発国や発展途上国の食糧問題が関連していると思います。それから社会関係が23％、医療関係が22％、鉱工業関係が14％、鉱工業関係は発展途上国ではまだ工業の発達が充分でございませんし、又どんどんプロモートする様な素地もないと、そういう事に影響されているのではないかと思います。そんな事で農業関係が一番多く、中南米は大体四分の一の人が行って働いていますが、私もその中の一人として働いていたのでございます。


南アメリカ
ブラジル
ペルー
ボリビア
チリ
パラグアイ
ウルグアイ
アルゼンチン
コロンビア
ベネズエラ
ガイアナ
スリナム
仏領ギアナ
トリニダード・トバゴ
カラカス
ボゴタ
リマ
ラパス
サンチャゴ
ブエノスアイレス
モンテビデオ
アスンシオン
リオデジャネイロ
サンパウロ
ブラジリア
ベレン
マナオス
ベロオリゾンテ
ポルトアレグレ
ポルトエスペランサ
ナタル
ペルナンブコ
ボルトアレグレ
ボルトエスペランサ
ボルトアレグレ
ボルトエスペランサ
ボルトアレグレ
ボルトエスペランサ

南米のアウトライン

(1) 南米大陸の発見

今からウルグアイの話に移りますが、その前にやはり南米の歴史を一寸知っておいてもらった方がよいと思います。南米大陸の発見といいますと、一九四二年のコロンブスは皆さんご存知と思います。コロンブスがその時発見したのはカリブ海の一つの島でございまして、大陸じゃなかったのです。コロンブスは四回航海していますが、二回目も島、三回目にやっと南米大陸の北の端、ベネズエラに上陸しております。それが一四九八年です。第四回が一五〇二～一五〇四年に渡りまして、北米と南米との掛け橋の様な所に行きまして、パナマ地峡を発見しました。というわけで南米大陸の発見のたて役者は勿論コロンブスでしたが、本名はコロンで、コロンブスとは言いません。

(2) 中南米征服の立役者

其の後の南米の歴史を語るのに二人の大変重要な人物がいると私は思います。色々な本を読んでそう思いました。南米はスペイン、ポルトガルが行くまではいうまでもなくインデオが住んでいたのですが、インデオは蒙古斑があるのです。ですから日本人と同じ様なルーツだと思います。それがベーリン海峡、北米大陸を通って、さらにパナマ地峡を通って南米の南までたどりついた

という事です。彼らは一つの彼らなりの文化を作りまして、メキシコのアステカ文化、ペルーのインカ帝国、そういうのが十三〜十四世紀まで非常に栄えました。そこへコロンブスの発見以後スペインとポルトガルはどんどん大航海時代といいますか、どんどん人を派遣しまして南米大陸の方へ入って行ったのです。そこでまず挙げなくってはならないのがエルナン・コルテスという人です。この人は一四八五年に生れて一五四七年に死んでおりますが、一五一九年にメキシコのユカタン半島に上陸しまして、アステカの皇帝にわたりあって、スペインの国王に忠誠を誓わせました。この民族、ここに住んでいたインデオはわりとおとなしかったのだと思いますが、そういう事があったのです。ところがやはりしばらくすると色々な事があってインデオの反乱がすぐ翌年の一五二〇年にありました。つまり入植したスペイン人が大分虐殺されたという事件でございます。それを見てスペインが非常に怒りまして、今度はインデオ征伐を始めたのです。一五二一年にメキシコシティーを奪回して、アステカ王国を滅ぼしてしまうのですが、その時インデオは純真だったため、ヨーロッパ人の悪賢いのがだましだまし、とうとう滅ぼしてしまったという様な事です。アステカ王国を滅ぼしたのはエルナン・コルテスで、ヨーロッパ人の中南米征服の一人の立役者です。もう一人はフランシスコ・ピザロ、この人は一四七五年に生れて一五四一年に死んだという事ですが、一五三一年に今度は南米大陸の方に上陸しました。それでコルテスのやったのをまねして今度は南米で俺がやってやろうという訳です。丁度その時にインカ帝国で内

乱が起ったのです。内乱は大体どこの時代でも女性がからんでる訳なんですが、インカの皇帝が正妻と妾を持っていたのです。それにそれぞれに優秀な男の子がいまして、それが皇帝の継承争いをやって、血を血で洗う様な争いを始めたのです。それに丁度ピサロが目をつけまして、ここぞとばかりにたった一八〇人のグループを作って乗り込んで行ったのです。それでうまくだまして皇帝をとっつかまえて、そしてお前の所の財産を全部よこしたら堪忍してやると、話を持ちかけたのです。それにまんまとのって財宝を全部渡したら其の後すぐに皇帝が殺されてしまいました。そしてインカ帝国は一年にして滅ぼうされてしまいました。これは一五三二年の事です。こういう様な悲惨な征服の歴史が南米にはあったのです。

(3) 南米へのスペイン・ポルトガルの入植

こうやってインデオを征伐したら、今度はどんどんスペイン、ポルトガルから移民を送り出しました。その時代インカ帝国は非常に沢山の財宝を持っていたのです。金・銀・色々がこのアンデス山地にはあるに違いないという事で入植したスペイン人がその辺を捜し廻りました。ボリビアのポトシ銀山は世界の銀の大半が産出したと言われておりますけれど、そういうのがどんどん見つかって行ったのです。これぞとばかりにスペインからあらくれ男を大勢送り出しまして、鉱山掘りをやらせ、産物を全部スペインの本国へ取り上げてしまったということであります。そういう様にしてあらくれ男だけがそういう地へ行くとどういう事が起るかというのはすぐにおわか

りと思いますが、インデオの女性との間にどんどん混血が進んで行ったのです。それが所謂メステーソ（Mestizola）と言われる白人とインデオの混血ということになります。表の人種構成でグループが四ツに分けられていますが、私が説明しやすい様にⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳと分けたのです。

Ⅱ番目のパラグアイ・ボリヴィア・ペルー辺りは混血とインデオでほとんど90％、これが現状で、白人は10％或はそれにみたない位という事です。こういう所に旅行しますと、まずボリビアの首都がラパスですが、パラグアイのアスンシオンに行ってみましても同様に白い人種はまず見かけません。ほとんどが茶色い顔をしたインデオ、或はメステーソという事になるのです。そういう首都を訪問すると、メインストリートはやはりヨーロッパ風にビルが並んで、通りの真中に広場があって鋼像が立っていてという事ですが、裏通りへ行くと、やはりインデオ的な感じで東南アジアの都市、或は田舎にかなり似た感じになってきます。それに対して、アルゼンチン、チリ、ウルグアイ、こういう所はどうかと言いますと、これもやはりスペインからどんどん移民が行ったのです。初めブエノスアイレスの近くへ行ったのですが、ここはやはり銀があるのではないかとそういう風に想像しました。そして今で言うラ・プラタ河を発見したのですが、プラタというのはスペイン語で銀という意味で、銀の河という名前を付けたのです。実際には銀は全く出てこないのですが、とにかく銀があると想像して付けたのです。その地域をリオプラテンセと言いまして、そこの住民もリオプラテンセと呼んでいますけど、アルゼンチンからウルグアイその

辺のことです。昔、日本でもお金の事を貸銀と言っていましたが、今でもリオプラテンセに行けばお金の事をプラタとも呼んでいます。スペイン語では紙幣の事をデネロ、コインはモネダと言いますけど、リオプラテンセでは今でもプラタが通用します。そういう習慣であります。そういう所へ行って彼等は彼等なりに色々捜したのですが、結局南米の南の方にはそういう物はないということであきらめてしまって、其の後入植は進まなかったのです。ところが少しは人が行っていたのですが、イエズス会が向うへ行きまして、キリスト教の布教をインデオに色々やりました。その段階でアルゼンチンの北部のパンパの平原を見付けましてこれは素晴しい所だ、ここでの牧畜を始めたら素晴しい所になると。そしてイエズス会の人達が牛や馬・羊をヨーロッパから持っていって放したのです。それがまんまと当りまして、結局広大な草原地であって非常に土壌も良いということで、牛も馬も羊もどんどん繁殖して、その結果アルゼンチンは世界の一大畜産国になってしまいました。そして多くの人達がどんどんスペインから移民として行くんですけど、その場合は全部家族単位で行ったようです。銀山の場合はあらくれ男が、男だけで行ったのですが、この場合は家族で行ったのだそうです。その結果混血というのはほとんど進まなかったという事です。彼等が牧場経営をやって牛や馬がどんどん増えて行く。もともとインデオはいたのですが、インデオ自身は野生の動物をとって生活していた訳ですが、畜産のためにどんどん土地を追われて彼等の食糧がなくなっていったのです。それで仕方なしに家畜でおとなしい牛や羊を簡単に取

っては食べ始めたのです。その時に入植した牧畜業者がこれは大変だと、インデオはまさに天敵だということでライフル銃でかたっぱしから見つけ次第射ち殺してしまったということなのです。しかもパンパの大平原、逃げも隠れもする所がないものですから、ほとんどインデオが完全に虐殺・殺されてしまった。そういう様な事が起った様です。ウルグアイもそうなんですが、そういう様な訳で南米の南半分のアルゼンチン・チリ・ウルグアイ辺りはほとんど混血が進まなかったから、またインデオも殺されていなくなったので、メステイソも出来なかったという事で、現在完全な白人国になったと言えると思います。それらが私が表に書いた第一のグループだと思います。

第三のグループの特徴は黒人が10％いることです。ブラジル・エクアドル・コロンビア・ベネゼーラというと南米の東側と北側になります。これはアフリカから地理的にも近いし、この地方は熱帯で、綿とか砂糖きびとかそういう農産物がよく出来たので、アフリカから奴隷をどんどんつれて来てそういう農業の労働に使っていったのです。その結果彼等が、すなわち黒人が10％位になったのです。それで、結局農業をやる場合、ライフル銃を持ってどうこういう事もなかった訳で、あまりインデオを征伐する事がなかったという事でインデオもいくらか残ってメステイソが出来、或は黒人との間のムラート（Mulato/a）と言うのも出来たのです。ということで、これらの地域はアフリカから近かった事から黒人が入り込んで、特用作物といいますか、綿とか砂

糖きびとかの農業がまず発展した地域だと考えられます。

ガイアナとスリナムは公用語が英語の国です。その他はブラジルのポルトガル語以外は全部スペイン語ですが、この二国は英語が公用語です。もう一ツ南米には仏領ギアナがあって、まだフランスが自分の土地だと言って頑張っているんですが、ここではフランス語をしゃべっているのです。ガイアナとスリナムは南米の東北の角にありまして、結局はインド大陸が近いのでイギリスが支配しておりました。やはりそういう農作物を作らせるという事で、インド・パキスタンから沢山の人を連れて来ました。そういう特徴がございます。そんな事から私は南米を物語る場合、これはひとつにしたんじゃおかしくなると思い四ツに分けたのです。

(4) 南米各国の独立とその立役者

その後それぞれの国が独立して行くのですが、ここで中南米の征服の歴史の話は終って、独立の歴史に移ります。このようにしてその後も移民がどんどん行ったのですが、そこで取れた農産物にしろ、鉱産物にしろ、全部スペイン・ポルトガルが全部自分の国に運んで、本国だけが裕福になって、スペインなどからの白人の入植者の子孫、クリオーリョ（Criollo/a）は常にインディオと共に虐待されていたのです。その時代がかなり続くのです。そういう事で一八世紀の終りぐらいからだんだん内部から革命的な事件が起ってきたのです。そこへナポレオンが一八世紀の終り頃、スペインとポルトガルを占領するのです。ポルトガルの王様はブラジルまで逃げて来る。

そういう本国が落ち目になったのを契機にして独立運動が一ぺんに盛り上りまして、一九世紀の初めに次から次へと独立が進んで行く訳です。その独立のたて役者が二人いまして、一人がボルバール、もう一人がサンマルチンという人です。ボルバールはベネズエラの人で、彼は一八一一年にベネズエラを独立しようと思って色々な事を始めたのです。はじめは失敗してしまうのです。ところが其の後色々な仲間を集めてとにかく最終的には一八一九年に大コロンビア共和国を作り上げるのですが、それが現在のコロンビアとベネズエラとエクアドルだと言われています。それから国が分れてしまうのですが、ベネズエラ自身はその後独立運動をやりまして、其の後一八二二年に完全に独立の旗を上げるのです。表に独立何年と書いてありますが、実はこの年代は本当に正確なのか私にはよくわかりません。色々な文献を調べてみますとウルグアイの場合ですが一九二五年と書いてありますが、ある本は一九二八年と書いてあります。というように色々な年代が出て来るのです。どれが本当かよく分かりません。歴史学者ならはっきりした事が言えますが、私は専門外ですのでそういうことは言えませんが、私が見たり読んだり聞いたりで、まあこの辺が妥当かなあという年代を表に挙げたのです。一方のサンマルチンという人はアルゼンチンの人で、一八一〇～一八一七年にわたってアルゼンチンで軍隊を組織して、アルゼンチンの独立を一八一六年に果たすのですけども、その後はアンデスを越えてチリの方へ行きまして、チリで独立運動を指導します。チリではオイギンスという人、後に大統領になった人ですが、彼を支援しま

して、結局チリの独立を果たさせる。これが一八一八年です。それに成功しますとペルーへ行きまして、ペルーの独立運動をサンマルチンが指導するのです。それでペルーが一八二一年に独立する。そういうことで南米全体の独立の革命指導者はボルバールとサンマルチンです。何故こういう話を申し上げるかといいますと、私、南米の北の方は行っておりませんが、ボリビア以南大体あっちこっち歩いてみたのですが、どこへ行きましてもこういう英雄の銅像が立ってるのです。アルゼンチンに行きますと田舎の小さな町でも中央の広場にはサンマルチンの銅像が立っている。ボリビアへ行くとボルバールの銅像が立っているということです。ウルグアイにもサンマルチンの銅像が立っています。ボルバールに関連した物も立っています。そういうことでこの二人の人は南米の各国で銅像が立っている。更に通りの名前、色々な物の名前にどんどん使われています。南米へ行ってまだ知らない間は何をした人かなあということになるのですが、歴史を調べてみると歴史のたて役者は非常に大事にして永久にメモリーを取っておくという姿勢がよく窺われます。

次にウルグアイの話をしますが、ウルグアイの歴史にも、やはり有名な独立に係わる人がおります。これはアルティガスという将軍です。そしてウルグアイでは何でもアルティガスです。街の中央広場では大きな銅像が立っている。田舎の町へ行っても銅像が立っている。メーンストリートはアルティガス通りだということになるのです。

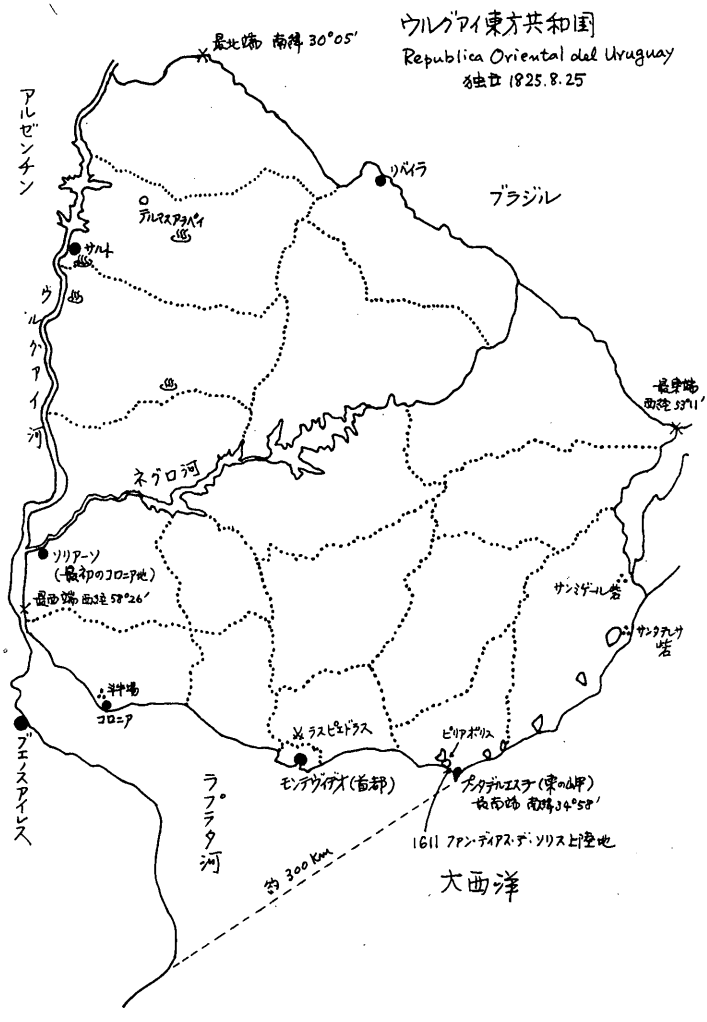
そうこうして一八二〇年の前後にどんどんスペインから独立して行くのですが、ブラジルの方

はポルトガルがブラジルの東北の角に入ってきまして、そこからインデオを手なづけてどんどん奥地へやって来て、やはり色々な鉱物資源を搾取して全部ポルトガルの本国に送っていました。それと同時にポルトガル人はせこいと言うのか、行ったとこでみな〝自分の領地だ〟〝自分の領地だ〟と言っていたのでブラジルがあんなに大きくなってしまったと言われています。行くとすぐ旗でも上げたのかしりませんが、自分の領地だと言うことを宣言して歩いたという話を聞いています。南米はブラジルだけはポルトガル語で他はほとんど全部スペイン語です。

ウルグアイのあれこれ

(1) 発見

さて、ウルグアイの発見には一五一六年フアン・ディアス・デ・ソリスという人がいます。ソリスという人は一五一六年の二月にラプラタ河のアルゼンチンに近いところに上陸したのです。彼がウルグアイの土地を発見し、リオ・プラタも発見したと記録が残っております。色々な本を見ますとソリスの発見は一五一五年だというのが圧倒的に多いのですが、それは何故かというと彼がスペインを出発したのが一五一五年でウルグアイに着いたのが一五一六年の二月、これはウルグアイから出版されている信憑性のある本にちゃんと書いてありました。その時に上陸したのですがそこに住んでいたインデオは非常に乱暴なチャルラ族という人食い人種でした。そこに仲


ウルグアイ東方共和国
Republica Oriental del Uruguay
独立 1825.8.25
最北端 南緯 30°05′
アルゼンチン
リベイラ
ブラジル
テルマスアラパイ
サルト
ウルグアイ河
最東端
西経 53°11′
ネグロ河
ソリアーソ
(最初のコロニア地)
最西端 西経 58°26′
サンミゲール岩
サンタテレサ岩
牛牧場
コロニア
ラスピエドラス
ビリアポリス
モンテビデオ(首都)
プンタデルエステ(東の山甲)
最南端 南緯 34°58′
1611 アン・ディアス・デ・ソリス上陸地
ブエノスアイレス
ラプラタ河
約 300 km
大西洋

間と一緒に上陸したのですが、人食い人種に食べられたという話になっています。そういうことから、しかもあまり大したものも見当らなかったと言うことでそのままになっていました。次にマゼランがポルトガルから南米大陸へ来まして、さらにインドへ行こうと思って大平洋からインド洋へ行く道をずっと探して廻って来たのです。マゼランの船団が一五二〇年にブラジルからやって来まして、今のリオ・ラプラタにやっと着いたのです。プンタ・デル・エステはウルグアイランドで有名なんですが、東の端、東の岬と言う意味です。ここからアルゼンチンのサン・アントニオの北の岬という角まで、これは大体三百キロあります。それが河と海の境です。三百キロと言えば私達がみればそれは海です。これが河だと言ったら誰れも信用しないのが当たり前です。ここへマゼラン達がやって来たのです。水をなめて見たら甘かった。塩辛くなかったのです。彼等はマル・ドルセ、マルは海、ドルセは甘い、スペイン語で、マルドルセと言ったのです。其の後これは河であることがわかって、アルゼンチンに来た人達が、リオ・ラプラタと命名したという経緯があります。マゼランの船はこうしてモンテヴィデオにきましたが、ずっと来る途中全く平坦で山がなかったのです。ところがモンテヴィデオに来まして、低い丘がありました。これは高さは百メートル一寸ですがそれでも彼等にとっては山だったのです。マゼラン船団の見張り番の人がそこで大声で叫びました。「我れ山を見たり」と日本語で訳しております。モンテヴィデオはポルトガル語でもスペイン語でもほとんど同じです。モンテは山、ヴィは見るの一人称単数

の過去形になりますが、オーは私で、「我れ山を見たり」。それが結局今のモンテヴィデオ市の名前の謂われになったと言われています。そしてモンテヴィデオのシンボルになっています。

ついでに申しますと、南米の色々な国の名前はそれぞれ名前の意味があるのです。ウルグアイはアルゼンチンとの間にウルグアイ河が先にあったのです。グアラニー族は今のパラグアイに住んでいるのですが、ウルグアイは、グアラニー語でウルという鳥の住む河。昔鳥が沢山住んでいたのです。ウルグアイ河にちなんでこの土地がウルグアイと言われていました。ウルグアイの正式の名前はウルグアイ東方共和国と言います。何故東方かというと、ウルグアイ河の東側に発達した土地になりたった国である。と、言うことで、スペイン語ではRepublica Oriental dil Uraguayとなります。ウルグアイの人は自分達のことをオリエンターレス（東の人）と言っています。日本人は東洋人でやはりオリエンターレスだというと、私達は兄弟だと親しみ深く言う人もいます。ちなみにアルゼンチンは入植した人が銀があるのではないかと考えて、この国は銀という名前を付けようと考えました。スペイン語ではプラタとなる訳ですが、スペイン本国の虐待といいますか、略奪といいますか、それに反抗して其の時にスペイン語を止めようということになり、スペイン語の元になるラテン語で銀の意味、これがアルゼンチンなので、国名をアルゼンチンと付けたのです。ブラジルにはブラジルの木というのが沢山あって、赤い染料がどんどん取れてインデオが非常に派手な物を着てますが、その染料に使われていたのです。それでブラジ

ルの木が非常に沢山あったというところからブラジルという名前が付いたようです。コロンビアは勿論コロンブスの関係です。本名はコロンなんですけれどコロンビア。エクアドルは赤道という意味で、パラグアイはグアラニー語のとさかを持った鳥で、丁度鶏みたいなものです。そういう様な意味で国名はいろんな謂れがあって付けられたという事になっております。

(2) 独立

ウルグアイはそのようにしてマゼランが一五二〇年に発見したのですが、マゼラン自身はラプラタ河をさか登って行ってもどうも太平洋に行きつきそうもないとあきらめ、さらにずっと南下しまして、今のマゼラン海峡を発見して太平洋に出たのだと言われております。一六一七年は大体発見されてから百年余たっているのですが、その頃にエルナンダリア（本名はHernando Arias）という人がアルゼンチンにいました。アルゼンチンはパンパの大草原で牛や羊や馬が大繁殖して一大畜産国が出来つつあったのです。彼はアルゼンチンからウルグアイを眺めまして、この辺も大草原じゃないかと言う事で筏を組んで牛と馬を積んで一六一七年に渡って来て放牧したのです。ウルグアイの国は、西の半分はパンパの草原で、私モンテビデオからサルト（ウルグアイの北西端に近いところ）というところまで車で六時間程走ったのですが、山なんて全然見えません。ずっと一面の平地でそこに見えるのは牛と羊だけです。丁度アフリカのサバンナでガゼルとか、キリンとか、縞馬をちらばした風景とまったく同じ様な感じです。野生の動物の代りに

これは全部牛と羊、これを見てもウルグアイもなる程畜産国だなあとわかります。エルナンダリアが一六一七年に渡って来たのをある本で見ますと、一六一一年と書いてあります。どっちが本当かわかりませんが、いずれにしても一六一〇年代です。それと同時に今度は南の方からも移民がやって来ましてコロニーを作りはじめましたが、ソリアーノ（一六二四年、Santo Domingo Sorians が作った）は一番最初に出来たコロニーです。その次がコロニア・デル・サクラメントのコロニー、通称コロニアと呼んでいます。その次にモンテビデオが出来たのです。そんなようにコロニーが出来た順番が今でも記録されているようです。

そういう風にしてウルグアイでも家畜が繁殖したのですが、やはり先程申し上げました様にインデオとの関係で結局インデオを全部征伐してしまったという事がございます。それから、はじめ牛と馬が来て、それから一七二六年に羊を持って来た。その後もいろんな経緯がございまして、どんどんコロニーが出来ていって結局インデオを完全に追払ってああいう畜産国になったという事です。ところが初めはスペインが入っていたのですが、ポルトガルはブラジル全部を占領しますと、どんどん南西の方にやって来てウルグアイという場所をポルトガルとスペインが取りあいするのです。しょっちゅう戦争があって、勝った負けたノということで、あっちこっちに、色々な所にポルトガルとスペインの戦争の遺跡が残っております。サンタ・テレサの要塞とか、サン・ミゲールの砦、これはブラジルとの国境に近い所ですけれど、スペイン軍がポルトガル軍を

打ち敗るために作った砦だという事で、ウルグアイの数少ない名所として残っていて今でも見る事が出来ます。それで暫くの間、百年位の間は、スペインとポルトガルの取りあいの時期が続くのです。そういう時代にこれは何とかしなくてはならないと言うことで、一八一一年に英雄ホセ・アルティガス将軍が旗上げして独立運動を開始します。それでまずスペイン軍をやっつけ、あるいはポルトガルもやっつけたという事だと思います。数年間のいろんな独立運動をやったんですけれども、結局一八一七年にポルトガル軍に負けてしまいまして、彼自身はパラグアイに逃れてそこで不遇の死を遂げるという事です。その間いろんな事があって、結局一時ブラジルの領地になってしまうのです。スペインの方はそれが非常に気にいらないものですから、ウルグアイにいたクリオジョ、すなわち白人の後継者やアルゼンチンに逃れてきた人達を支援しました。それでアルティガスの部下であった様な人達がウルグアイの土地は自分らが生れた土地だと言うことでそこを奪回しに行くという事が起ります。それが一八二五年という事です。その時の大佐ラバジエハという人が大将になりまして33人のウルグアイ人をアルゼンチンから連れてきてウルグアイ河を渡って上陸して大きな旗を立てます。これは非常に有名な旗で、モンテビデオにはあっちこっちで、また美術館でも見る事が出来ます。それには「自由か死か」と大きく書いてあります。そういう言葉を真中に赤と青と白の三色旗を立てて、それで33人の人が旗上げをするのです。そうしますとウルグアイにあちこちに残っていたクリオジョが全部そこへ集まってきてポルトガ

サルト市内中央広場にある独立の英雄アルティガス将軍の銅像

ルの政府軍と戦争を始めまして、結局撃退しまして、ここで完全に自由独立を宣言する。それが一八二五年の八月二十五日で独立記念日という事になっております。したがってウルグアイでは33というのは大変重要な数字です。先程申しました様に、ある本にはウルグアイの独立は一八二八年だと言っておりますが、それは何故かと言いますと、其の時までは独立して彼等が自由に行動する様になったのですが、しかしまだ共和国としての体裁は全然整ってなかったのです。それで一八二八年十月八日、その時にリベラという将軍がやはり自分達の国は共和国として整えようじゃないかという事で、そこで

初めてウルグアイ東方共和国と国名を付けて宣言したのです。そこをもって独立だというので一八二八年と言うことになります。そうして国名が出来てスタートするのです。けれど、実際の憲法は一八三〇年の七月十八日に第一回の憲法が発布されまして、これでもって民主的な国家が初めて出来上ったということになります。それが非常に大きな記念日になりまして、ウルグアイの首都モンテビデオの街の一番大きな通りはアルティガス大通り、一番の繁華街は七月十八日通りということでそういう記念の人の名前や月日があちこちに出てくるということです。このようにしてウルグアイがやっと完全に独立したのです。

(3) 地理的位置

ウルグアイの位置は南緯30度から35度位、西経が53度～59度位で丁度日本の真裏に相当します。ほぼ地球の真裏で温帯に属しておりますので、大体産物は日本でできる作物はほとんど出来ます。どちらかと言いますと日本より少し暖い。モンテビデオの街の中には街路樹のヤシの木が沢山有りますので、宮崎とか鹿児島を想像して頂ければいいと思います。ウルグアイは具体的に言いますと、伊豆半島から奄美大島までの間に位置しているのだと言われています。モンテビデオの街には全然雪は降りません。氷も張りませんし、霜もおりません。郊外に出ますと霜も下りますが街はやはり暖く霜も下りず氷も張りませんのでそういうことで日本の東京や京都に比べるとずっと住み易いという土地でございます。それで日本の移民の人はこのモンテビデオの周辺でほとん

どが花を作っています。彼等が花を作っている理由は色々あるかも知れませんがよくわかりません。モンテビデオの街自身は非常に緑が沢山ございます。案外街の住人は花を買わないのだということです。日本の移民の人に貴方どうして花を作っているのかと聞きましてもはっきりしませんが、花はほとんどがお墓への献花とかセレモニーの時の花だそうです。ウルグアイの人達は先祖を大事にするので、花は結構売れるそうです。それに比べまして対岸のアルゼンチンのブエノスアイレスの街に行きますと、うんと大きくなりますが、中心街にはまったく木がない感じで本当に建物ばかりで非常に沢山の花が売れるそうです。ＪＩＣＡの農業関係の試験場がブエノスアイレスの郊外にありますが、そこは移民の中心地であって、特にカーネーションなんかは二、三年栽培するとヴイルス病にかかって駄目になるものですから、毎年組織培養苗を作ってそれを配布しています。モンテビデオの日本人もみなその苗をもらって栽培していました。そういうことがありますので花を作る人が多いという事もあるようです。

(4) 過去の繁栄

独立してから、その直後にウルグアイでは二つの政党が出来ました。ブランコ党とコロラド党。ブランコ党は白、コロラド党はカラーという意味で赤です。これらの党に二人の党首が出まして、一人が初代の大統領、もう一人が二代目の大統領になり、地方と都会の方でそれぞれ地盤を持ったのです。それが其後もずっと続いておりまして、現在でも大統領選挙は五年ごとにありますが、

大低交代するのです。今年は今月の二十八日が投票日だと思いますが、それによって今のブランコ党がコロラド党に変るようです。何故そう変るのかと言いますと、ウルグアイは一時は非常に裕福だったのです。それは第一次世界大戦、第二次世界大戦でヨーロッパが食糧難の時に畜産物を全部ヨーロッパへ、或は米・小麦をどんどん船で持って行っては高値で売ったのです。そのお金でヨーロッパの財宝をどんどん持ち帰って、或はヨーロッパの各地の大理石を持って来て、いろんな大理石で素晴らしい建物がいっぱい出来ているのですが、そういう非常に裕福な時代がありました。南米のスイスだとか、或は牛の背中に乗ったパラダイスとかその様に言われて来たのです。それが第二次世界大戦後は一時よかったのですがだんだん駄目になって来たのです。と言うのは戦後、平和になってアメリカその他あっちこっちで大量に食糧増産をして、農作物の値段がダンピングして売れなくなってきたと言うことです。そしてどんどん左前になってきて、とうとう現在では完全な左前なんです。ですから政党が変われば少しは良くなるかと思って別の党に投票するようです。

(5) ウルグアイ人気質

ウルグアイに住んでいる人はラテンアメリカの人達で極めて呑気です。日本人の様に一生懸命やって復興して世界一になろうとは全然そんな考えではないんです。生活はエンジョイする事であると、そのために最低働けばいいのだと言うことで本当に遊ぶのが上手です。私達日本人は

土・日休みなら何をしようかということになるのですが、向うの人はみんな貧しいなりに、金持の人は金持なりにヨットはあり、別荘はあり、家族ごとで遊び廻る。国は非常に貧乏なんですが、ウルグアイの人達を見ていると余り貧乏になっているような気がしないのです。確かに大きな貧富の差がありまして、もともと持っていた人は今でもかなり裕福ですね。ところが持っていない人は国が貧乏になったらいろんな福祉もみな駄目になりますからどん底になってしまいます。しかも工業がないものですから失業率が非常に高く、モンテビデオの街にはスラム街が出来た所があります。とにかく私達の付き合う向うの階層はハイクラスになりますが、大学も出ている、外国へも行っている人達で、親からの財産で、見ていたら極めて優雅で、私達より遙かに、私達の家よりずうーと大きな家に住んでいるのです。なんでこんな国に日本が技術援助をするのかなと、援助しなければ日本の国民がもっと裕福になる。みんな家がちゃんと持てる様になる。どうして政府がそうしないのかなあと、そんな矛盾を自分で技術協力をやりながら、しょっちゅう感じながら仲間と、ねえ君……とそんな話が出てくるんです。実際に南米に行くと金持はすごいです。ウルグアイでも裕福な金持は何千、何万町歩というエスタンシア（農場・牧場）を持っていて、どんどん牛や何かも外国へ輸出しています。そういう人達が政治の権力を握っていて、国会議員になって自分のいいようにやっています。あんなのを見ている我々とは桁違いで何となくこっちが卑屈になる様な感じがするのです。

向うの人達を見ていますと、非常に人懐っこい面があるのですが、また非常にプライドが高いのです。やっぱり自分らはヨーロッパから来たのだと、もともとエリートだと、お前達は東洋人だと、何となくそういう感じがあります。街の中を歩いていますと私達はすぐ東洋人だと分るので、子供達が親にむかってすぐチノ、チノというんです。チノは中国人、と言うのは中国人が沢山いたのです。ところが彼等は印象がよくなかったのでしょうか。日本は非常に沢山の技術援助をしている。どの位の国民に知られているかは疑問ですが、知る所は知っています。また、街中には日本製品が氾濫しています。自動車、カメラ、電気製品などなど。ある程度の階層の人は日本には一まいおいていますが、とに角東洋人を見ると、自分らの民族の方が上なんだというプライドがあるようです。それからヨーロッパの人を見ていると分ることですが、日本とは随分違います。同じ職場の中でも上下関係が日本ではシビアですね。社長に向って一般社員が「おい社長」なんてなれなれしく話す事はまずないのですが、向うは研究所の所長に畑の農作業をする人が対等に話をしているのです。農作業をしている人もひげをはやしているのです。私達が見たらどっちがどっちか分からないのです。対等にやりあっているのですが、所長はトップです。そういう訳で私らが付き合っている研究員でも所長に向って対等にやっている。それはざっくばらんで好きな様に好きな事を言えて非常にいいなあともいえます。日本人だったらすぐ奥歯に衣きせて言いたい事が言えないと、そういう状況になるんですけれど。向うの研究所の研究員にも勿論

それぞれの専門があります。私の場合三人、女性二人と男性が一人、技術支援の対象のカウンターパートがいたのですが、彼等と話をする時はまったく対等です。先生なんて言う敬語なんてないのです。「おい田中」と、こっちも名前を呼びすてるんです。一人はステラ、一人はクリスチーナと、名前を呼びすてです。まあ非常にザックバランに付き合えるというか、私はまあ文化の違いかも知れませんが非常にいい面でもあるし、ある意味では気楽な面でもあったと思います。

向うの学校は小学校から大学まで大部分国立で、全部ただで一銭も授業料がいりません。大学は卒業するまでの年限はございませんからだら〳〵と十年位行っているのもいます。三十五歳位になってもまだ大学に行っています。大学生だとバスの安い券が買えるのでそれを有効に使っているのです。どういう事かといいますとその途中でみんな勤めているのです。私の行っていた研究所でも学生でありながら勤めていて、カウンターパートになっている。そんな人もいるんです。只で学校に行けて結構だなあと思うんですが、研究員の給料は大体三十四、五歳で五〇〇～六〇〇ドル、日本円で五～六万円位です。食糧品等非常に安いものですからそれでいいのですが、私なんかがウルグワイはワインは安いし、牛肉も安いしいい所だと言うとすごく怒るのですね。貴方日本人は日本の給料もらって来ているから安く思うが、我々の給料からでは安くないとねじこまれるのでそれ以後は言わなくなって、日本人同士でワインは安いなあと。スーパー等に行くとミネラルウオーターと変らないので、いつもミネラルウオーターを買わずにワインを買ったもの

です。

(6) 南米の南半分はワイン王国

ワインの話をしますと、ブドウのヴイールス病の研究を始めてから、私ワインが大変好きになりまして、ワインについて本を買って色々勉強しました。ヨーロッパの研究所やアメリカの大学に行った時も、向うで色々な話を聞いたり色々な事を教えてくれたりしました。大分前ですが日本で貴腐ワイン騒ぎがございましたね。ジェチレングリコールを混ぜて貴腐ワインだと言って売りだしたという騒ぎです。貴腐ワインは世界では三ヶ所しか出来ないといわれていますね。フランスのボルドとドイツのラインとハンガリーのトカイの三ヶ所しか出来ないのです。他ではほとんど出来ないのです。日本では山梨でサントリーがある一年少し出来た。それは例外なんです。ですから一寸知っていたらオーストリアワインが入って来て貴腐ワインだと騙される方がおかしいのです。其の後日本のワインも少しラベルが詳しくなりまして、ブドウの品種名を書いたりし始めました。それ迄国産ワインは数量も少なかったのですが、何も書いていないのでさっぱりわかりませんでした。ところがドイツ、フランスに行きますと厳しいワインの統制があり、特にドイツの場合はワインの銘柄にはっきりしたクラス分けがあるのです。まず高級ワイン・準高級・テーブルワインと分かれています。高級ワインは更にカビネット、スペートレーゼ、アウスレーゼ、ベーゼンアウスレーゼ、トロッケンベーレンアウスレーゼ、さらにアイスバインとランクが

きちっと書いてあります。フランスへ行きますとアペラシオン・コントローレ、そしてその二つの言葉の間に地域の名前が書いてある。ボルドウとか或はソルティヌとか、或は村の名前、或はオーナーの名前が書いてあります。それが小さくなればなる程高級で高くなります。このようにフランスワイン・ドイツワインはラベルを見ただけで品質は聞かなくってもわかります。ところが他の国のワインはそういうことはありません。ウルグアイ、南米も、先程申し上げました様にアルゼンチン・チリ・ウルグアイは白人国でこの人達はほとんどワインを飲んでいます。地域的にも温帯に属している部分があって、ブドウの栽培が可能です。そんなことで非常に盛んでございます。アルゼンチンのメンドウサ、丁度ブエノスアイレスの真西辺りなんですが、アンデス山脈の麓に大きなブドウの産地がございます。世界の三大ブドウ産地といいますと、フランスのボルドとドイツのラインモーゼルとアルゼンチンのメンドウサと言われるぐらいの大産地で、ワインの生産量はものすごく多いのです。ここのワインの中には大変品質のいいものがあり、ラベルにもちゃんと品種が書いてあります。ワインの品質は、まずブドウの品種が一番、それから土地、気候、その三つのファクターで味がきまるのです。日本の場合には土地と気候がブドウ栽培には不適なのです。だからヨーロッパのいい品種が日本で作れないという条件があります。「日本でいくら頑張っても安くて良いワインが出来ない」と言ったらワインを作っている人に怒られますけれど。非常にいい品質のワイン用のブドウ品種が日本では栽培不可能に近いのですが、それは

非常に高湿で病気が発生するからです。日本ではブドウが棚になっていますが、あれはブドウ園の湿度を減らすためなのです。風が吹いたら棚の下がさっと湿度が低くなる。ヨーロッパへ行きますと全部フェンス仕立とかポール仕立てとかで、棚なんていうのはイタリアのアドリア海に面したごく一部その他少ししかございません。日本のワインの悪い事を言っても仕方がないのですが、南米には非常にいいワインがありますし、私自身も非常に安いので毎日楽しんで飲んでいました。普通のビンを買うと一本三百円位で、それでも高いので、三リットルの大瓶を買うと一本にすれば百円余りになるのです。ウルグアイでは二日に一本なり三日に二本なりを毎日飲んで過して来ました。

(7) 異文化

最後に文化的な面を少し申し上げますと、テアトル・ソリス、つまりソリス劇場というのがあります。ソリスはウルグアイの土地を発見した探険家で、その名前を記念してつけたのです。ソリス劇場は小さいのですが、中に入りますとぐるっとバルコンがありまして、映画に出て来るヨーロッパの劇場と全く同じ様子です。大分古くなりまして照明施設が駄目になり、それで日本の援助で全部中の照明施設をやりかえたという経緯があります。それからカラスコ空港という国際空港がありますが、それにも大分日本が手を加えたりしておりますので、そういう事を知っている人は日本に非常に好感を持っているという感じなんですが、まあ多くの人は知らないかもしれ

ません。テアトル・ソリスなんですがヨーロッパからオーケストラ、ロシアバレー団、日本からも東京カルテットなどが来ます。日本でカルテットは五〇～六〇あるそうですが、そのNo.1が東京カルテットだそうです。ファストーバイオリンはカナダ人がやっていますが、あとは日本人です。これらは毎年モンテビデオの音楽協会が招へいしたりして来ているのです。私はそれによく行ったのですが千円位で聞けるのです。其の他タンゴショーをやったりします。タンゴはアルゼンチンタンゴが有名なんですけど、このタンゴはミロンガというのがもともと有りまして、それがいろんな影響を受け、さらに黒人の歌と踊りのカンドンベが加わってできたのです。アルゼンチンで発達したからアルゼンチンタンゴ、それが今度スペインの方へ行きまして、コンチネンタルタンゴになったようです。そのタンゴですが、タンゴの編成はまずバンドネオン、バンドネオンと言いますとアコデオンの大型の様なもので、スタッカットと言いますか、チャチャチャと、タンゴは非常に歯切れがいいのです。ブエノスアイレスに行きますとタンゴショーをやっている有名な所が四ツ有ります。二ツに行ってみましたが、何時も終るのは真夜中の一時か二時で、それからホテルにタクシーでやっと帰るのです。普通バンドネオンが四～五人いて、バイオリン・ベース、それからピアノ、それでタンゴオーケストラが編成されるのです。ある時にはそれに男女の踊りが加わります。アルゼンチンのタンゴという事で、最近日本のＦＭでも随分タンゴをやっています。そうして聞いていますとＮＨＫでも南米の色々の音楽を随分沢山やっていまして、

それにでくわすとああ南米やっていると思って私いつも聞いております。有名なラ・クンパルシーターは、実はそれを作曲した人はウルグアイ人です。ウルグアイのモンテビデオの街の中にラ・クンパルシーターというタンゴレストランがあり、そこへも行きましたが、大体終るのが三時なんです。それ迄にぎやかにやっています。それにやはり日本では一寸見られないなあと思ってびっくりした話なんですが、キューバのバレー団がモダンバレーという事でやってきました。それで私、家内と仲間の夫婦と四人で行って、まあこのぐらいの場所がいいだろうと一階席の真中ぐらいに陣取って見ていたのです。パンフレットを見ますと、四ツ出し物があって、それぞれ二十分づつ位あります。ふっと見たら三番目にデスヌーダというのがあるんです。なにげなしにヌードかなあと思って見ていたのです。三番目の舞台があいて二人の女性が出て来て踊り始めましたが、勿論トップレス、さらにボトムレスでした。モンテビデオの海岸は奇麗な砂浜で、そういうところに夏の間は大勢の女性が出て来て日向ぼっこしています。これは日照量の少ないヨーロッパの地中海沿岸の風習です。大方ビキニ姿なので、私達はそういう所にはなかなか近よりがたいものですが、近づいて見ますとヘヤーが出ていたりするのがいるのです。日本は「いい」のが○ですが、向うの○はひわいな意味なので使ってはいけないということです。東南アジヤのタイに行った時に絶対やってはいけない事があります。子供を見て頭をなぜたらいけない。特に左手でなぜたらいけないのです。左手は非常に不浄の手で、それで子供の頭をなぜたらこれ以上の

侮辱はない訳で、絶対にこれはやってはいけないと。私、タイに二度程行きましたがそういう事を教えられました。そういうような訳で色々な面で異文化を感じる事が出来ました。

おわりに

私、九月にウルグアイへＪＩＣＡの調査団で行ってきたのですが、今度十二月五日から三週間またウルグアイに調査団で行って来ます。向うにいる時から新しいプロジェクトの準備をしてきたのですが、その最終的な契約のサインをするというものです。来年三月スタートという事で三月始めから二年位、健康である限り、また向うでの生活が始まると思います。まあいろんな過去の三年三ヶ月で知りえなかった事を見てきたいと思ったりしています。前回、向うで三年間個人で先生についてスペイン語の勉強をして来たので、今度行って街中に出てもまあ何とかそう不自由なしにやっていけるかなと思っています。でも日本に帰って来て忘れるといけないと思いＮＨＫのスペイン語講座をずっと聞いてます。

丁度今、ラジオのスペイン語講座は日本に来ている中南米の人達のインタビューをしています。講座の時間中ずっとその人達にしゃべらしているのです。今はエルサルバドルから来ている女性がしゃべっているのです。その人はエルサルバドルからアメリカへ留学しまして、其の時に日本人を初めて知り、リトル東京での日本の催物に招待されてそこへ行き、そこで日本の異文化に接

して興味を持ち、また、そこで知りあった日本人と結婚して日本に来ており、知的な仕事をやっているのです。娘さんが二人いて、その一人が小学校に入ったのですが、ハーフなので学校に行くと外人々々といじめられたのです。子供は泣いて家に帰って「お母さん家ではスペイン語を使うのを止めて日本語にして」と。そこでお母さんは娘さんにじゃなく飼っている小猫に向ってスペイン語を話すことにしたそうです。家の中ではいつもスペイン語が聞えていたのです。子供は自分にではないけれども何時もスペイン語を聞いていたのです。その結果がどういう事かといいますと、娘さんは十六歳になって、彼女も大人になってやっとスペイン文化を自分で知る様になり、非常にそれに興味を持って、大学ではスペイン語学科に入りたいそうです。そして「私は日本とスペインの両方の文化を知る様になった」と。それでその女性が言いますのに「従来あいの子はハーフ、ハーフと言われていたが、ハーフというのは間違いで、ダブルだ。あいの子は二つの文化を、やり様によってはちゃんとマスターする事が出来る。私の娘もちゃんと成功した。日本の文化も、ラテンアメリカも、スペイン文化もマスターした。これはハーフではなくて、ダブルだ」と。そういうところを今スペイン語講座でやってるのですが、私それを聞きテキストを読みまして、なる程そうだなあと思います。私自身もやはり南米へ行く事によって、スペイン文化、ラテンアメリカ文化を少しでも理解出来たし、とうていダブルまでいきませんが、1.2までいったろうかと考えて、自分でも南米が大変好きになっています。やはり今後も外国で何か仕事をする

のなら、また外国に行くのでしたらもう一回南米に行きたいと思い、自分でも色々お膳立をして来ました。それがやっと外務省の了解も取れ、ゴーサインも出て、近い将来再び南米へ行くことが出来る様になったという事です。

まとまりのない話でしたが、どうもご清聴有難うございました。

後記　平成七年三月一日に成田を出発して再びウルグアイに来ております。国際協力事業団の柑橘に関する新しいプロジェクトの技術協力が与えられた仕事です。またしばらく南米の地で生活し、新しい発見をしたいと考えております。

（前農林水産省果樹試験場保護部長）